

吉増剛造賞 第3回高校生小論文コンテスト入賞者授賞理由

NO.	題名	氏名	性別	学年	学校	授賞理由
最優秀賞	行動すること。そして、考え、また行動する	橋本綾音	女	2年	千葉県立浦安高等学校	東日本大震災当日とその後の筆者の行動と思索が、臨場感を湛えつつ的確に表現されている。混乱の中で人々の「行動」から多くの大切なことを感じとった筆者の眼と心の素直さが伝わってくる。身近な経験から筆者が学んだことは、将来、国際的環境の中でさまざまな局面に於いて活かされていくであろう。
優秀賞	このままではいけない！地球市民としての食糧事情	加瀬紗弥香	女	3年	千葉県立旭農業高等学校	“不平等な食糧問題”の解決に向けて自分に何が出来るのか、と高校生としての知識や想像力を総動員して考え抜いている真摯な姿勢が伺える。食糧自給率の低い日本が「食育」という側面から貢献できることを論じるなど、農業高校で食育を研究し、高度職業人を目指す人ならではの独自の視点が示されている。
優秀賞	踊らされる人々	藤原まゆ	女	2年	北海道札幌国際情報高等学校	宗教問題を背景とするポソ紛争と東日本大震災を例にひき、真実な情報発信の重要性を訴えている。国内外で発生した異なる地域で起こった出来事から共通の課題を見出した視野の広さと洞察力を評価したい。ノンフィクションライターとなる夢を果たした彼女の「読み手に安心を届け」る文章を今後、楽しみにしたい。
優秀賞	自然と共に生きる	和田麻美	女	2年	長野県長野高等学校	『奇跡のリンゴ』という書をもとに、農業と自然についての深い考察を行っている。自然に対する畏敬や謙虚さを持つよう訴える投稿論文は他にもあったが、本論文は、祖父母のリンゴづくりの話も交え、また原発事故にも話を発展させつつ論じている点がユニークである。説得力の点でもぬきんでていよう。
佳作	震災から考えたこと	大田菜由子	女	1年	北九州工業高等専門学校	九州在住の為、今年の震災について直接体験はなかったが、震災から派生した事を通して地球的規模の諸問題について意識を深め、自分が今後何をなし得るか多角的に考えているようである。文章のはしばしに、高専で学ぶ身の独自性が簡潔に表現されており、高く評価出来る。海外メディアの報道にも関心を寄せている事がうかがえるのもよい。
佳作	「ちがいを」楽しむ	郭彩華	女	3年	埼玉県立伊奈学園総合高等学校	「ちがいを」とは何か、そして、それをどう受け止めて楽しみつつ国際理解を深めていくべきか、在日外国人の日本人観を引用して論じている。昨年の本コンテストで取り上げた「異文化理解」についてのすぐれた応募論文と通底する内容である。繊細な観察、日本語を母語としない事も手伝っての文体の新鮮さが印象的である。
佳作	認識、対比、思索、実行	北村歩	女	1年	大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎	ごみの「ポイ捨て」への対応など身近な問題に触れ、その一方で、動植物をも「地球市民」としたり、地球を擬人化してこれへの気配りを説くなど微視・巨視の双方向から提案を行っている。所定の余白に対してやや急ぎ足の展開になっているが、独自の筆力が感じられ、将来が楽しみな一人である。
佳作	8月9日・長崎から「地球市民」を考える	園田恒	男	3年	青雲高等学校	実現不可能という声も聞かれる「平和」の実現に向けて、一つひとつ丁寧に論じているところに筆者の強い思いが感じ取れる。国境を越えた市民グループの交流、或いは、互いの国の苦難の歴史の共有など、パブリック・ディプロマシーの時代と謂われる今日の地球社会に必要とされる要素を、自分の言葉で的確に表現している。
佳作	地球市民として生きる	中村友加里	女	3年	千葉県立成田国際高校	日常生活で交わされるメールから視野を広げて、現代世界で情報もつ力について考察した優れた小論文である。「私」の日常生活、チュニジアやルワンダの政情、震災後の日本と世界を、短い文章のなかで見事に繋げて描き、さらには情報の受け手としての個人の使命に思いを馳せており、発想が豊かである。文中では「地球市民」という語を敢えて用いず、「地球市民」とは何かについて読者に深く考えさせる構成になっている点が見事である。

佳作	地球の現実	松原瀬奈	女	3年	城西大学附属城西高等学校	災害を語り継ぐことや支援を継続することについて訴える。結論自体は常識的との感もあろうが、自分の体験から学び、そこから導き出したところが尊重されよう。その体験を世界が抱える問題の解決へとつなげるために、留学や中学教諭志願など、将来の夢が語られているのが頼もしい。
佳作	地球市民として生きるということ	渡部絢乃	女	3年	桐朋女子高等学校(音楽科)	参加した日韓の間の高校生交流という具体的プロジェクトを切り口に、物事の二面性にまつわる問題意識を掘り下げ、ステレオタイプに惑わされることなく多面的に判断することの必要性を提言している。みずからの体験と知識を基に、とかく通念や思い込みに捉われがちな韓国に対する自分の考え方をよく相対化している。

国際部門

NO.	題名	氏名	性別	学年	学校	授賞理由
国際部門賞	地球市民として生きる	贾婧雯	女	2年	中国上海甘泉外国語中学 (中高一貫校)	中国から東日本大震災をみて感じたこと、考えたことを述べており、そのこと自体がすでに地球市民的といえる。地球市民が助け合うべき意見は、決して独創的ではないが、四川大地震の想起はこれに実感を与えてくれている。規則正しい日本人の長所についても国や地域にそれぞれの長所があり、それを見習おうという相対化と地球市民形成のプロセスがかいま見られ好ましく感じられた。
国際部門賞	地球市民として生きる	マイヤー セシル	女	1年	チューリッヒ日本人学校日 本語補習校	地球市民として生きよという言葉はキレイゴトのように見え、それがゆえに個人を押しつぶす面があるという指摘は興味深い。しかもマイヤー・セシルはその個人の自己満足をあえて肯定した上で、それが他人のためになる論理を提案するという思考の深化を見せている点が評価できる。